

# 個人の記録を社会の遺産に

——「女性の日記から学ぶ会」20年の活動を通して——

島 利 栄 子

## 目 次

はじめに

第1章 活動の動機

第2章 活動の歴史「女性の日記から学ぶ会」20年の歩み

第3章 活動の4原則

第4章 活動の内容

第5章 研究の実例——「松崎宗子日記」を読む

第6章 今後の課題

## はじめに

平成28（2016）年6月「女性の日記から学ぶ会」は創立20周年を迎えた。20年の活動を振り返り、記念誌『女性の日記から学ぶ会 二十年の歩み 平成8年～28年』を出版し、6月11日に126名の全国会員と共に「20周年を祝う会」を行ったところである。

中央大学・吉見義明教授から活動について書くことを勧めて頂いた。論文の執筆は不慣れであり悩んだが、このような機会はめったにないことであり、ここで活動の歴史を振り返り、今後の展望について考察しておくのは必要なことだと判断し、思い切って書かせて頂くことにした。このような機会と様々なアドバイスを頂いた吉見教授に大変に感謝している。

## 第1章 活動の動機

私は昭和47年頃から夫の転勤先の山口県周防地域の昔話の採集を始め、以来、主に女性たちからの聞き書きを続けてきた<sup>1)</sup>。

夫の転勤で平成元年に千葉県に引っ越し、それを機会に実家がある長野県へ老親の介護に通うようになった。幸いにも、長野県の地元紙『信濃毎日新聞』紙上に平成5年4月～7年3月まで連載執筆の依頼を頂き、「ときを刻む女」の取材で長野県下の女性たちを訪ね歩くようになった。そこで、何人かの女性から日記の処分の相談を頂くことになった。

天皇や政治家、作家ならいざ知らず、庶民の日記は破棄されるのが普通である。本人が捨てるか、家族が捨てるか、どちらかである。しかし書いた本人にとってはかけがえのない人生そのものであり、なかなか捨てがたいものなのである。私自身小学2年生（昭和27年）から日記を書き続けてきたので、日記を簡単に捨てられないという気持ちが痛い程に理解出来た。

そこで「日記は捨てないで、私に任せてください」と大見えを切ってしまったのである。

---

1) 私の著作には以下のようなものがある。『周防の女たち証言・嫁姑のたたかい』（マツノ書店、1988年）、『山国からやってきた海苔商人』（郷土出版社、1991年）、『千葉はたらく女』（東銀座出版、1991年）、『キッチンの窓から』（郷土出版社、1993年）、『ときを刻む信濃の女』（郷土出版社、1995年）、『いくさと愛と』（監修、東京新聞出版局、1997年）、『木更津の女たち』（共著、たけしま出版、1997年）、『日記拝見!』（博文館新社、2002年）、『戦時下の母』（展望社、2004年）、『母の早春賦』（一草舎、2006年）、『八千代の女たち』（共著、八千代市、2004年）、『白井風土記』（編集・共著、白井文化懇話会、2009年）、『手紙が語る戦争』（みずのわ出版、編集責任、2009年）、『時代を駆ける吉田得子日記1907-1945』（みずのわ出版、編集責任、2012年）、『親なき家の片づけ日記信州坂北にて』（みずのわ出版、2015年）。

無理を言ってお借りして帰る電車の中、セピア色の戦時下の日記を紐解きながら湧き上がる興奮を抑えることは出来なかった。戦時下という過酷な時代であるのに、日記の中では1人の少女が泣いたり、喜んだり、怒ったり、まさに生き生きと輝いていた。教科書では知り得なかった初めて知る生身の人間がそこにいた。

平成8年『地域新聞』の取材に「日記を一緒に読む仲間がほしい」と話した。それが記事になり5名の方から電話を貰った。更に私の友人たち5名を誘い、その年の5月、合計10名で準備会を発足させた。月1回烏島に集まり昼食を共にしつつ、日記読み解き作業にチャレンジし、活動の基本作りを話し合い、同志的な思いを深めていった。「プライベートな日記を果たして預ける人がいるか?」「寄託・寄贈文書を交換すれば安心なのは」「会則や会報を作ろう」など意見が出て1つ1つ決めていく中で、庶民日記を収集・保存・研究する活動が日本でも珍しいことを知り、全国的に会員を募ろうということになった。会の名前は「女性の日記から学ぶ会」に決めた。「学ぶ」に日記から教えて頂くとの思いを込めた。「女性」と付けたのは私の聞き書き対象の多くが女性であったからである。会報の名前は温かいイメージを持たせ『日記ろまん』とした。

## 第2章 活動の歴史「女性の日記から学ぶ会」20年の歩み

### (1) 初期の頃（平成8年～12年）

平成8年2月から1年の準備期間を経て、平成9年5月14日（土）初めての「つどい」の日を迎えた。

雨の中100名。清水幸子さんが紅白の幕を持ってきて祭り気分を盛り上げ、伊藤久恵さんが沢山のバラの花を飾ってくれた。私は夏帯でコースターを作り記念品にした。温かいつどいになった。和やかで熱

気あり。私も落ち着いて話せた。皆集中して聞いてくれ気持ちがよかった。懇親会も楽しかった。夜は3人が我が家に泊まる。山口県からの永野さんもご一緒。遅くまで話す。気持ちが昂り眠れず<sup>2)</sup>。

はじめの1年目。研究発表の場である「わいわい日記塾」、読み解きをする「史料班」、会報『日記ろまん』発行もスタートした。会員も100名に達した。

日記も『信濃毎日新聞』の「女の歲月」連載（平成9年4月～平成11年12月）のための取材などを通して「松崎宗子日記」「吉田得子日記」「小林艶日記」「進藤五十鈴日記」「笠原徳日記」など会の宝になる貴重な日記との出会いが続く。珍しさ故か、はじめから多くのマスコミの方に紹介して頂いた。

「2周年のつどい」「3周年のつどい」「4周年のつどい」まで毎年新しい試みに挑戦し多彩なゲストもお招きした。

## (2) 中期Ⅰの頃（平成13年～17年）

### 移動日記展活発に

中期Ⅰは、全国津々浦々に会の活動を知ってもらいたいと移動日記展に情熱を燃やした時期である。地方の友人らの協力を得て無料の会場をゲット、次々に移動日記展を開いた。平成13年秋は忙しかった。「日記と歩む過去・現在・未来」展を山口県光市、続いて同県防府市、京都市と移動して開催した。初めて見る会場で手際よく即興の飾り付けをした。展示物の梱包、発送、片付けに苦勞した。よくこんな荒技が出来たものだと感心する。

2) 「島利栄子日記」より。

翌14年には長野県塩尻市で「女性の日記 信州展」を成功させ、次いで地元・八千代市市民活動サポートセンター開所式や八千代市市民平和展「戦争を生き抜いた日記展」、四街道市民平和展「同」で好評を博した。

また年1度のお祭り「つどい」でも毎回、1日だけの展示にもかかわらず「美しい展示」を目指して全力で臨んだ。6周年のつどいは「松崎宗子追悼日記展」、7周年は「激動の時代を生きた平野仁蔵日記展」を開催した。8周年「育児日記の魅力展」は特に印象に残る。

#### シャルレ女性奨励賞受賞する

平成13年晩秋、「シャルレ女性奨励賞」受賞とのニュースが飛び込んだ。全国で活発な活動をする女性団体574団体の中から選ばれたもので、贈呈式は平成13年11月27日、東京会館で行われた。事務局の面々が揃って出席した。福祉や国際交流活動が多い中で女性の日記資料の保存・活用をめざすユニークさが受賞の理由だったようだ。

#### 一人芝居「女の力」と朗読劇「黄水仙」に沸く

平成18年。「女が伝える展Ⅰ、Ⅱ」のタイトルで日記展を行った。「Ⅰ」では若い男性がお婆さんに扮し昔の女のおおらかな生き方を伝える一人芝居「女の力」（原作は島利栄子『周防の女たち 嫁姑のたたかい』）。翌年の「Ⅱ」では「松崎宗子日記」をもとにした朗読劇「黄水仙」上演にこぎつけた。この時期、腹話術や講演「歌は思い出を連れてくる」など他分野との連携にもチャレンジした。

#### その他いろいろ

ユニークさからマスコミに登場することが多く、そのおかげで会員が増え、日記寄贈に繋がった。NHKテレビ「いっと六けん」「生活ほっとモーニング」、NHK「ラジオ深夜便」「ラジオ朝一番」や、『朝日新聞』『日経新聞』『読売新聞』『赤旗』『聖教新聞』『中国新聞』などだ。また『いきいき』など雑誌にも登場。私は乞われればこまめに顔を出して宣伝に努めた。

## (3) 中期Ⅱの頃(平成18年～22年)

## 10周年を祝う

平成18年。10周年を祝う3つの事業を行った。「10周年のつどい」は松崎宗子日記を題材に戦時下での夫婦愛を伝える朗読劇「黄水仙」の上演で祝った。また「女性の日記から学ぶ会」関係資料目録を作った。歴史年表と比較して見られるよう個性ある作りとし、1,000部発行し、無料配布した。『日記ろまん』特別号は2ページ増やし発行した。「華麗なる十年」を見開きで作成し活動の歴史が俯瞰出来る工夫をした。多くのマスコミにも注目され、NHK土曜ジャーナル「女たちの戦争—日記が刻んだ記憶」の協力へと続いた。

「庶民の日記展」「安曇野日記展」「姫路平和資料館」「吉田得子日記の里」へ

平成18年、残暑の残る8月に「庶民の日記展」を東京の高橋書店で10日間開催した。日記を書く人の会「日本日記クラブ」と合同の催しだった。日記クラブの皆さんと力を合わせて展示したり交流させて頂いた。共に日記の魅力を信ずる同志だとの共同認識も持てた。残念ながら、日記クラブはこの後、閉会、42年の活動に幕を下ろした。

翌19年3月には信州安曇野で「安曇野日記展」を行った。友人の経営するそば処・「信州坊主」を使って信州関係の日記をお披露目した。高校時代の友人たちの協力で賑やかな展示会、講演会となった。

同6月には姫路市平和資料館「子どもたちが記録した日常」展見学と、岡山県瀬戸内市へ吉田得子日記の里を訪ねる旅に出た。総勢10名を超える大旅行だった。得子さんのお墓にも参り出版を心に誓った。

## 戦時下の手紙への関心——出版へ

会の大きな財産の1つが太平洋戦争時代の手紙や日記である。日記塾での発表、12周年のつどいでの展示などを通して出版への道が開けた。平成21年6月、13周年のつどいで『手紙が語る戦争』の出版を祝うことが出来

た。戦時下の様々な立場の11名の手紙を紹介し、みずのわ出版社長・柳原一徳さんが撮影した実物写真を多く載せ臨場感を出した。戦争によって普通の暮らしがいかに破壊されるか、平和がいかに大事かを静かに訴える1冊となった。翌22年8月には佐倉市「佐倉一里塚」で「手紙が語る戦争展」を開催、好評を博した。この出版を契機に、若い研究者が会に参加するようになったのも大きい。

#### （4）中期Ⅲから現在（平成23年～27年）

##### 吉田得子日記出版

当会には一代にわたって書かれた日記は10名分を超える。記録を通して人として成長する姿と継続する偉大さを目の当たりに学び、感動を禁じ得ない。その中の一つが「吉田得子日記」である。会が発足して間もなく朝日新聞の紹介記事を読んだご子息・吉田堅氏から寄贈を受け、研究班が出来、以来十数名が13年以上も翻刻作業を続けていた。明治・大正・昭和を生きた膨大な日記を1冊に編集し世に出すのは楽なことではなかったが、西村榮雄班長の熱意の下、私の実家である信州坂北での合宿も含め根気よく編集作業を続け、みずのわ出版・柳原一徳氏の撮影、編集技術のおかげもあって、平成24年『時代を駆ける吉田得子日記 1907-1945』が出来あがった。ありがたかったのは462名もの方から協賛金を頂いたことである。その後、得子の故郷・岡山県瀬戸内市邑久町で「お里帰り日記展」を行い大好評を博した。得子さんは時代を駆けて故郷に錦を飾ったのである。

##### 青年部の活躍

『手紙が語る戦争』出版を契機に若い研究者の入会が続いた。活動を若い層に繋げたい、繋げねばならぬと願ってきたので、「青年部」を立ち上げ、「聞かせて あなたの戦中戦後」プロジェクトを一任することにした。幸い当会には日記も語り部も豊富に存在する。戦争を知らない世代に「記

録」と「記憶」の両面から戦争の実態を深く学んでほしいと願っての試みだった。その後、青年部は会の古老4名に取材をかさね、日記塾、つどい等で学びの成果を発表している。その真摯な姿に今後の活動の展開を確信するものである。

#### ラジオ深夜便と新たな第一歩

平成25年8月14、15日、NHKラジオ深夜便「明日へのことば」に出演し、会の活動を声で伝えた。固定ファンの多い人気番組で、全国津々浦々70名以上から感動の声が寄せられた。多くは「共感した」というもの。また日記や手紙の処分に困る高齢の方が多いことも知った。ホームページは1日150名が訪問。それが数日間続いた。日記提供者が5名。入会者が5名。ラジオ深夜便の力に驚いた。

#### 20周年を祝う

大きな節目を記念するものにすべく3つの事業を行った。まず1つ目は『女性の日記から学ぶ会 二十年の歩み 平成8年～28年』の出版である。活動の足跡を正確に遺しておきたいと、2年前から構想を練り始めた。「わいわい日記塾」80回分の資料と会報『日記ろまん』64号分の2つを完全に復刻したいと考えたが、出版社に見積もりをお願いしたところ、かなりの出版費用が必要なことが分かり断念せざるを得なかった。自分たちの身の丈に合った記念誌を作るしかない。

そこで、日記塾は『日記ろまん』の記事を再使用しようと考え、それを軸に、様々な活動の局面を、写真、最小限の書きおろし原稿や一覧表で埋め、『日記ろまん』の総目次、所蔵する日記名、会員名など20年にふさわしい記録も付けることにした。編集作業は4名で分担して当たったが、終盤の校正作業は多くの会員に手伝ってもらい総力をかけて出版に臨んだ。おかげで『女性の日記から学ぶ会 二十年の歩み 平成8年～28年』はずしりと重く、活動の歴史を如実に物語るものとなった(図表1)。



図表1 『二十年の歩み』表紙

# 女性の日記から学ぶ会

## 二十年の歩み

平成8年～28年

女性の日記から学ぶ会  
編集責任 島利栄子

青木たつ日記  
飯島ゆき糸日記  
飯塚とみ日記  
飯沼松子日記  
行俊光子日記  
伊藤伸子日記  
伊藤ヒデ日記  
今井泰子日記  
今井泰日記  
植草範子日記  
上田一枝日記  
内川亨日記  
大島静日記  
大月雄喜章日記  
小谷信子日記  
笠原徳日記  
勝浦米穀商の日記  
金井芳美日記  
川名しず日記  
神澤廣吉日記  
本更津高等女学校  
生徒の絵日記  
木村房子  
國田神  
熊崎淳子日記  
小島富七日記  
向坂源一日記  
小林健日記  
坂本栄子日記  
櫻井家日記

図表2 図書館での展示



2つ目は八千代市立中央図書館との連携で活動の場が広がったことである。我が家に保存してきた日記たちを図書館内周密書庫に寄託させて頂くことが出来、その流れの中で創立20年を記念する日記展「戦中戦後の日記いろいろ」を3週間に亘って実施することも出来たのである（図表2）。詳細は「第4章 活動の内容」で述べたい。

3つ目は「20周年を祝う会」の実施である。毎年6月第2土曜日に行う「つどい」は活動場所である八千代台東南公共センターの八千代市男女参画センターや大ホールで行ってきた。「20周年を祝う会」は趣を変えてホテルで食事を楽しみながらゴージャスなものにしたいと考え、佐倉「ウイシユトンホテル・ユーカリ」で行うことにした。幸いにも秋葉就一八千代市長を始め、全国から多くの会員をお迎えし、126名参加者を得て賑やかに実施することが出来た。短い時間ながらロビーで展示も行った。会員同志

が自由に交流し、「日頃の活動の意味や、心の持ちようなどが表れた気持ちのよい会だった」とたくさんの感想を頂いた。「祝う会」の後、希望者に八千代市立中央図書館へ移動してもらい、寄託している日記と、記念日記展「戦中戦後の日記いろいろ」を見て頂いた。

### 第3章 活動の4原則

「活動の4原則」というのがある。この言葉がいつから始まったのか。はじめの頃の「つどい」で、私は自分の考えをまとめる程度の軽いノリで、大事にすべき基本姿勢を話した。分かり易いので気に入って、何かあるごとに話し、会員も自然に受け入れてくれ、いつしか活動の4原則として定着するようになった。

#### (1) 原則1・日記筆者提供者に最大の感謝を捧げよう。プライバシーに配慮して臨もう。

ふつうは、個人の日記は実にプライベートなものであり、他人に見せるものではない。それを会の活動に提供してくれるのだから、もう感謝以外の何物でもない。

受け取った私たちも「そこから学ばせて頂く」という気持ちを土台に日記筆者の人生から多くを学び、そこから次代に譲り渡していく庶民文化を構築したいのである。「研究のための資料」という従来の考えと大きく違う点は、日記筆者の丸ごとの人生から何かを学び取りたいという視点である。日記筆者並びに提供者が生存しておられ、背景をお聞き出来るのも当会の活動の大きな特徴である。

そのために日記提供者には、会報を送り、活動の姿を知ってもらうよう努力してきた。信頼関係の構築に一番心を砕いた。そうは言っても、この信頼関係を作るのは簡単なことではない。貴重な日記が世の中から消えて

しまった例もいくつもある。「小林波奈日記」「塚田浅江日記」にその实例を挙げたい。

#### 「小林波奈日記」の場合

小林波奈さん（長野県飯田市，大正8年生まれ）は昭和13年から戦中・戦後を通して100冊もの日記を書いてきた。戦中には若い女教師として勤労女学生と共に戦い，空襲下の防空壕の中でも必死に記した。戦後は教師として，妻として，母として懸命な人生を歩んだ。まさに「とも働き」のはしり，幼子を背負って教壇に立ち寸暇を惜しんで日記を綴った。彼女の日記は女性史そのものと言えた<sup>3)</sup>。

高齢になった彼女はそんな日記の処分を真剣に考えていた。「すばらしい日記，捨ててはいけない」と説得を重ねて，4度目“飯田詣で”の時に，半ば略奪するようにして100冊の日記を借りて帰った。これが会を始めるきっかけになったのだが，彼女は「鳥さんには見せたが，ほかの人に見てほしくはない。他人に利用されるなんてもってのほか」と叱られてしまった。数年をかけて根気よく説得を続けたが，了解は得られなかった。

この秀逸な日記は彼女の死によってこの世から消えてしまった。

#### 「塚田浅江日記」の場合

塚田浅江さん（長野県更埴市，明治43年生まれ）の場合も同じだった。彼女は満州開拓団の教師だった。昭和20年8月，ソ連軍の銃撃でほとんどの教え子を亡くし死の逃避行の後，たった3名の児童を連れて帰国した。戦後は「生きて帰った。だから平和のために」と生涯独身で教師をしながら日中友好，中国孤児支援のために人生を捧げた人だ。彼女も100冊以上の日記を書いていた。何度も食事を共にし布団を並べて寝るなど，本当にかわいがってもらった。が，「日記は焼き捨てるもの」と頑として譲らなか

3) 小林波奈『いくさと愛と 女性教師の戦中戦後日記』（島利栄子監修，東京新聞出版局，1997年）参照。

った。平成12年、90歳で亡くなった。日記の行方はいずこへ。その後、親族に聞いてはみたが、返事はむなしなものだった。彼女の日記も希望通り、土に帰ってしまったのであろうか<sup>4)</sup>。

**(2) 原則2・個人の財産を社会の遺産にする活動である。根気よく、柔軟に臨もう。**

庶民の日記は、筆者には見せようという気持ちはなく、また極めて個人的なものである故に、政治的、学術的な記述は少なく、日々の暮らしの断片的な記録が多い。生活や暮らしの記述は実に個性的で、アトランダムである。この多彩な記録から、従来にない新たな庶民史の研究が進むのではないだろうか。

筆者および関係者が生存中は、プライバシーの観点から研究も一定の気遣いが必要であるが、時間の経過とともに、それは社会の遺産として歴史資料となっていくはずである。現在、会が収集保存してきた日記資料は明治末から現在までのものがほとんどであるので、遺産となる時期まで多くの配慮をしつつ大事に保管、活用して次代に譲り渡していきたいと考えている。歴史を重ねれば重ねるほど価値が出てくる活動だと信じている。

**(3) 原則3・研究は生活者の視点を大切にしよう。女性ならではの着眼点にも自信を持って臨もう。**

次に読み解きがある。日記を読んで感ずることは人様々である。会の多くのメンバーは研究者ではなく、主婦であり、退職後の高齢者である。そのときに自分の暮らしに関係する場所に目を凝らすことになる。病に苦しむ人は病の記述を、家庭の人間関係を悩む人はその記述を追う。普通の女

---

4) 『ときを刻む信濃の女』（島利栄子，郷土出版社，1995年）参照。

性の場合は生活面の様々な記述に関心を寄せる。例えば食事であり、家計管理であり、育児であり、介護であり、交際である。ある人は洗濯の回数を、ある人は餅つきの回数を拾い出した。戦前の女性は洗濯など家事に追われ、戦中では食べ物を採すのに奔走していた。それが高度成長期に洗濯機、冷蔵庫など電化製品の出現により家事労働は大きく軽減されていく。このように日記からあるデータを拾い出すと社会の変化が手に取るように見えてくるのである。

また高齢者が1日に付き合う人の数を日記からカウントすると、昔の田舎暮らしの方が、今の核家族より多くの人々と関わり合っていることもわかる。現代の社会が抱える問題も意識出来るのである。

#### (4) 原則4・日記の虚実を見極めよう。日記には嘘もある、見極める眼力を持ち臨もう。

日記の記述は真実に近いものであるが、真実ではない。日記を記述する時、すべてを書けるわけではない。時間的、場所的に制約された中で、筆者はある部分を切り取って記録する。その切り取り方は、ひどく個人的なものであり、真実とは言いがたいものだ。また意図的に自分を美化したり、正当化したりもする。知らずに間違いを書く場合もある。そこを理解して読み解きを進めねばならない。

日記を読むと日記の世界に耽溺し魅惑される。が、その罠にはまってはならない。他の日記と比較したり、社会的背景を探ったり、筆者の個人的な傾向を考慮したりと、冷静な視点を持って臨むことが必要である。

幸いにも当会は20年の間に様々な日記資料を所蔵するようになっていく。1人の日記を通読すること、つまり「つづき読み」だけでなく、同時代の他の様々な日記を較べて読むこと、つまり「ならべ読み」「くらべ読み」の土壌は整っている。

また当会には様々な年齢の会員、また様々な地域の出身者がいる。会員同士での切磋琢磨にはもってこいの環境も整っているのである<sup>5)</sup>。

## 第4章 活動の内容

### (1) 日記収集

問題の日記収集だが、2つのパターンがある。1つ目のパターンはマスコミなどで活動が紹介されたときに見ず知らずの読者から電話が入る。私の電話番号は掲載可能なら書いてもらうようにしているが、書いてない場合でも読者自身が新聞社などへ自分で電話し調べて、私へ連絡をくださる。今は亡き親族の日記を寄贈したいというものがほとんどである。丁寧に話を伺い、その後すぐにこちらから活動を紹介するパンフレット、会報をお送りする。すると、また相手から電話や手紙がくる。信頼関係構築のために丁寧過ぎるほど丁寧な対応を心がける。代表に会いたい、良い日記があるから出版をしないかなどまったくの「おかど違い」の場合もある。丁寧に断りをする。しかし8割が1カ月以内に日記の寄贈、入会へと進む。が、すぐに“見合い”が成功しない場合にも、諦めずに会報はしばらく送り続ける。根気よく時間をかけると、入会されたり寄贈されたりと良い結果を見ることになる。

実例を挙げてみよう。平成26年8月終戦記念日にNHK「ラジオ深夜便」に出演した時の反響は大きかった。70名ほどの方から電話を頂いた。日記提供者が5名。入会者が5名だった。ラジオ深夜便のリスナーの心情が日記の会の活動に近いものと理解出来た。

平成28年1月19日『朝日新聞』全国版「ひととき」に会の活動が私の顔入りで紹介された。「日記の処分に困る」という方の投書に応える形で、

---

5) 紀田順一郎『日記の虚実』（新潮社・1988年、ちくま文庫・1995年）参照。  
西川祐子『日記をつづるとのこと』（吉川弘文館、2009年）参照。

「みずから処分する」「自分史を書くために使う」と異なる立場の3人の実践者と並んでの紹介であった。その結果、30名程の方から電話を頂いた。すぐの反応は多くはなかったが、春から秋までぼつぼつ続いた。『朝日新聞』購読者数が800万人というから、反応してくれた人30人はまさに海辺の真砂から落としたイヤリングを拾うようなものだ。自分の日記20冊を寄贈してくれた人、母親の日記60冊、祖父の日記4冊、お姑の日記1冊などを寄贈頂いた。自分の先祖に有名人がいてそれを得々と話され宝物として大事にしているという日記のコピーを送ってくださった方もいる。何回かのやり取りで「やはり決心がつかない」と、菓子折りを送ってくださった丁寧な方もいる。そのつとつとお礼を書き、心を尽くすようにしている。

最近はかなり丁寧に書いてくれた記事でも反応が少ない。すでに多くを当会が揃い上げてしまった故か。それとも時代が変わって書く人が減ったか？ 日記を保存している人が少なくなったためか？ やや寂しい気もするとともに、だからこそ収集に力を入れねばという焦りも感ずる昨今である。

2つ目のパターンは全国各地に入る日記の会会員の情報である。地方紙などにこんな投書が載ったと知らせてくれる。私から電話をかけて話す。が、これは不調に終わる場合が多い。警戒されるのである。

収集は信頼関係の構築以外にはない。丁寧なお付き合いが、日記収集の最大のツールだと言っても過言ではない。

## (2) 日記保存

本部である島宅（八千代市）に保管してきた。その手順を簡単に記しておこう。まず日記を受け取ると、寄贈書・寄贈請書並びに寄託書・寄託請書を交換する。「扱いについては会に一任。ただし活字にする場合は必ず確認を取り交わす」また「のちの返却希望には応ずる」の注も付けてい



る。ひとまずはこれで安心してもらえる。

日記のほこりを払い、並べて整理。経年別に番号をふる。保存状態を確認して簡単に修理をほどこす場合もある。糸で閉じたり、同じ素材、色の紙を探し修繕する。保存用の箱は業者から色を揃えて4種類の箱を購入して筆者別に整理して並べる。箱には総番号と筆者名を記す。少しずつ増えていったので何回か買い足して現在は100箱程度になっている。

島宅も普通の家なので手狭になり、平成14年夏、1部屋を増築し、座敷には本箱や書庫を作り保管場所に当てていったが、次第に増えていく日記に対処出来なくなってきて、ようやくこの活動の最大の問題は保管場所なのだ気づくようになった。また火事や天災が起きた場合を考えると眠れない夜もあった。湿度や温度の管理なども不安になった。

私はここ数年、研究機関や日記出版社、公的な機関を歩いて「保存して頂く」可能性を探るようになった。しかしどこも保存庫がすでに満杯であったり、該当資料の条件もあつたりで、保管をお願いする場所を探すのはなかなか難しいことがわかってきた。

そんな時に日頃から活動を見て来てくださった八千代市の関係者から近いうちに建設予定の八千代市立中央図書館の書庫ならば若干の保管スペースも取れるかもしれないとの情報を頂いた。願ってもない話なので、秋葉就一八千代市長を始め関係職員に根気よく働きかけを続けた。

平成27年7月に八千代市立中央図書館が開館となり、その会館記念事業の一環として図書館内の学習室で「女性の日記から学ぶ会」の日記展を開催すること、また秋葉市長と私とのトークショーが実施されることになった。日記展では当会の活動の歴史と八千代市の財産である「平野仁蔵日記」72冊の展示を行った。多くの市民から「こんなユニークな活動があることを知らなかった」「八千代を代表するすばらしい活動である。頑張ってほしい」などの好意あふれる反応を頂くことが出来た。

このことが1つの引き金になり、日記を保存してもらおうという動きに拍車がかかったのはありがたいことである。

同年9月、八千代市の教育委員会に「日記寄託依頼書」を提出し、無事に受諾された。こうして正式に、図書館内周密書庫内に日記を寄託することが認められた。但し注として「3年に1回、お互いに見直しをする」「活動内容を最低年1回市民に公開してほしい」という2条件が付けられた。

同年11月末、「実行は早い方がよい」と判断し、十分な整理整頓も出来ない状態ではあったが、急遽90箱を島宅から八千代市立中央図書館周密書庫へ引っ越しさせた。

まだ日記は増えるであろうし、果たしていつまで預かって貰えるのか不安は尽きない。が、先のことは考えまい。次の世代に未来を託すところである。

### (3) 日記読み解きの場「史料班の日」

日記研究は「史料班の日」と称して月1回集まって個人別、班別に自由に研究している。八千代市内の人を中心に千葉県内の人、東京など近県の人も加わって20名ほどで行っている。20年の間には「吉田得子日記班」「育児日記班」「小島富七日記班」「松崎宗子日記班」など多くの日記班が活動してきた。多い時で7つもの班があり、出版にまでこぎつけた活動もある。が、現在は「平野仁蔵日記班」「飯塚とみ日記班」など数が減ってきた。今後は目録作成活動と連携しつつ、提供頂いたままになっている日記を中心に史料班の日を充実させていきたいと考えている。

### (4) 研究発表の場「わいわい日記塾」

「わいわい日記塾」は誰もが研究発表出来る場である。会が始まってからすぐスタートし、現在まで年4、5回のペースで開催してきた。個人で

あったり、班であったりするが、各人がテーマを決めて資料を用意し1時間30分から2時間話す。発表した経験もない主婦であれ、高齢者であれ、それぞれの視点で自由に発表する。レジュメもA4で30枚以上も用意する猛者もある。その後の質疑応答も実に多彩で楽しい。どなたもが発表者に敬意を表しつつ、自分の人生と重ね合わせたユニークな質問、意見を述べる。とんでもない質問に笑い転げることも。政治的、宗教的な違いはあろうが、お互いの人生を尊重した和気あいあいの雰囲気は保たれているのは、日記を通して多角的に人生を学んできたからだろう。

はじめから意識していたつもりはないが、次第に「わいわい日記塾」はかの有名な「松下村塾」や「適塾」に匹敵するのではないかと大それた実感を持つようになった。

80回の日記塾の内容を、20周年を機に一覧表にまとめた。（付表1『二十年の歩み』より）。

##### (5) 移動日記展

「移動日記展」と称して全国各地で日記展を開催してきた。年に1回行う「つどい」の場での日記展、来てほしいと依頼を受けて行った日記展、八千代市内で行った日記展、それと鳥宅で行った小規模の日記展を合わせると、51回になる（付表2『二十年の歩み』より）。

展示は「伝えたいことを一般の人にわかりやすく見せるかを学ぶ場」である。展示する場所により見てくださる人も変わり、そのたびごとに多くの学びをしてきた。また一般の方に会の活動や日記の価値を知ってもらい、日記の発掘にも繋がる場でもある。また会員同士の親睦の場ともなっている。

無料でホールや資料館などを拝借させてもらい、旅費、宿泊代から日記の運送費などすべてを会員の自腹で補ってきた。よくやってきたと会員に

感謝している。

#### (6) 会報『日記ろまん』の発行

会報『日記ろまん』は1年3回(はじめの頃は4回)、500部を発行し、会員や応援者に郵送してきた。全国各地の会員に情報を流し、心を結集させる“飛び道具”である。またマスコミや研究者の手にもわたり新たな発掘や出会いにも直結している。近く65号が発行になる。

#### (7) 「つどい」

「つどい」は年1回のお祭りである。講演、ミニ日記塾、日記展が目玉である。会員の交流と親睦を縦糸に、啓蒙のための一般公開を横糸にしている。毎回100名以上の参加を得て賑やかである。つどいのテーマははじめの頃は同じだったが、あと出来るだけ変えるように努力してきた。

#### (8) 出 版

会員の総力を結集し会として出版したものが、4冊ある。すでに前述しているが出版年度順にもう一度まとめておきたい。10周年を記念し、会所蔵の日記等史料を目録化した『女性の日記から学ぶ会 関係資料目録』(2006年)。戦時下の様々な立場の方11人の手紙をまとめた『手紙が語る戦争』(みずのわ出版、2009年)。明治・大正・昭和三代を生きた女性一代の日記を15年の歳月をかけてまとめた『時代を駆ける吉田得子日記 1904-1945』(みずのわ出版、2012年)がある。そしてこのたび会創立20周年を記念して出版した『女性の日記から学ぶ会 二十年の歩み』である。

出版費用は会費、並びに寄付金、また全国から出版協賛金を募っての出版で、いずれも少部数出版である。「地道な活動の結実」と高い評価を頂くことが出来た。

### (9) その他の活動

啓蒙のための講演は、記録ノートを見ると島だけで350回を数える。県下の公民館や生涯大学校での講義が多い。参加人数は1人でも構わない、乞われればどこへでも日記持参で駆けつけてきた。

特筆すべきは、八千代地域の公民館と協力にして小学5年生の国語授業のお手伝いをしたことである。戦中の日記3人分から食事、手紙、勤労奉仕について解説を試みた。日記を手取る好奇心いっぱいの子供たちの姿が印象的であった。こうした「出前授業」の機会をもっと積極的に作り日記の面白さ、記録の大切さを、次世代に伝えていきたいものである。

## 第5章 研究の実例―「松崎宗子日記」を読む

すでに述べたように、当会では一代に亘る日記を10名余所蔵している。「吉田得子日記」「時岡八七子日記」「平野仁蔵日記」「宮原正幸日記」「今井泰子日記」「笠原徳日記」「塚本昌芳日記」「島利栄子日記」「飯塚とみ日記」など、そして「松崎宗子日記」である。

一代の日記から学ぶところは大きい。①1人の日記を通して社会変化が読み取れる。②継続して書き続けるすごさを実感する。③人の一生へ理解が深まる。

一代の日記を読み通すには時間はかかるが、その魅力を提示したいと願っている。

ここで実例として、20年弱をかけて読み解きを続けてきた「松崎宗子日記」の研究の一部を概観しておこう。

### (1) 「松崎宗子日記」とは

松崎宗子さんは大正5年生まれ。長野県松本市入山辺に生まれ暮らした農家の主婦である。平成13年に86歳で死去された。昭和18年元旦から日記

を書き始めた。動機は前年に出征した夫・誠さんに書き送る郵便の備忘録としてである。簡素な雑記帳の上半分を4つに区切り、自分の出す葉書・封書・送り物と、夫から来る郵便とが一目で分かるように記録した。それが日記を付ける動機となり、終戦後に夫が帰ってからは意欲的な農業日記に変わってゆく。大学ノートの見開き半分には、夫が何をしたか、家族が何をしたかが1日1行の短い記述で綴られている。残り半分は何を買ったかの簡単な家計簿になっている。(図表3「松崎宗子日記」の1頁)

こうして宗子さんは晩年は書道や踊りを楽しみ、花を作ったりと、自然に恵まれた環境で家族と共に穏やかに暮らしながら、日記を書き続けた。

幸いなことに宗子さんには日記保存の活動を十分に理解して頂き、会の活動が始まるとすぐに昭和18年から40年までの日記を寄贈頂いた。おかげで、以来、松崎宗子日記班を中心に多くの会員がそこから多くを学ばせて頂いてきた。

平成13年に宗子さんが亡くなってから、次女の富子さんのご好意で、昭和41年から平成12年までの日記を寄贈頂き、当会では、現在、「松崎宗子日記」全冊60冊余を所蔵するところとなっている。

宗子さんの極めて短い記述の中から、生業、衣食住、年中行事、冠婚葬祭、信仰、付き合いなど、戦中から戦後、そして高度成長期から平成へ変容する社会にあつての山間部の生活の諸相が読み取れて興味は尽きない。ここに読み解きの実例のいくつかを紹介したい。

## (2) 戦地(夫)と交わした書簡

宗子さんは昭和18年元旦より前年暮れに出征した夫の誠さんへ熱心に便りを送り始めた。農作業に追われながら毎晩遅くまでペンを握り、農作業の報告や、畑や庭の風景、そして子供の姿をイラスト入りで書いた。それを翌朝、新聞配達人にポスト投函を依頼したという。こうした書簡のやり



取りが、特に夫からの返信が、彼女の生きがいであった。日記から書簡のやり取りの回数を拾い出すと以下の表ようになる（図表4）。

昭和18年には彼女からは139通を出し、夫からは39通をもらった。昭和19年には155通と増えているが12月には返却26通が含まれている。これは戦争の激化でせっかく出した便りが一括して返却されたことを意味する。夫からは「転戦になるからもう葉書は出さないでくれ」との知らせもくる。昭和20年は書簡の往復も不可能になり、宗子さんは不安で日記記述も滞りがちとなる中で終戦を迎える。周囲に復員してくる人が増える中で夫はなかなか復員してこない。日記にはその苦しみが消えるような文字で刻まれている。そして昭和21年7月夫は元気に復員する。「嬉しさに胸一杯」の1行に万感が溢れる。日記からはこうしたデータを冷静に拾い出すことが出来る。歴史と照らし合わせての分析は今後の研究の課題である。

図表4 戦地（夫）と交わした書簡の数（松崎宗子日記から）

	年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	小計	合計
宗子 ↓ 戦地	18年	9	17	18	17	15	9	9	10	5	10	11	9	139	309 (返送31)
	19年	13	16	20	15	17	18	14	12	15	9	5	1 (返26)	155 (返26)	
	20年					3 (返2)	4	5	1	1				14 (返2)	
	21年		1 (返2)		(返1)				18日 復員					1 (返3)	
戦地 ↓ 宗子	18年	6	5	4	7	2	3		1	2	3	4	2	39	91
	19年	3	9	5	13	5	2	2	2	3		1	3	48	
	20年					2		1						3	
	21年						1	18日 復員					1		

- 注：1. 宗子は日記に、自分が手紙・ハガキ・送り物を出した日付と、戦地の夫からハガキを受け取った日付をメモしている。それらをもとに回数を算出した。  
 2. なお、宗子からのものは手紙・ハガキ・送り物の数を合計している。  
 3. (返)は、宛先不明で返送されてきたハガキ等の数。



(3) 高度成長期前後の食生活の変容——家計記録から

次に日記の半分を占める家計記録からどんなことがわかるであろうか。記録は買ったものと値段だけで、量は記されていないから不完全な記録と言えよう。が、中から食品の購入回数を拾い出しおおざっぱな食生活を推察してみた。観測点を昭和28、29年と昭和38、39年の2点に定めた。この時期は高度成長期の前後だ。比較すると食生活の変化が浮かび上がってくるのではないかと期待してデータを取った。結果が次表である（図表5）。

わかってきたことは次の3点である。まず第1に動物性たんぱく質の摂取量が飛躍的に伸びている。肉や卵などが多く買われるようになった。牛乳は遅れている。

第2に洋風化が進んだことである。お菓子里にキャラメル、チョコレート、アイスクリームが出てきた。ハム、ソーセージ、クロquette、フライなど練り製品が豊富になった。ここには出てこないが、調味料も洋風化が進

図表5 食品購入状況（松崎宗子日記から）

	魚				鶏卵	肉	牛乳	加工品			菓 子			砂糖	茶	酒	類							
28年	イカ 25	サンマ 14	サバ 16	ホッケ 6	ニシン 5	イワシ 3			つかだ煮 10	かんづめ 2	ちくわ 3	とうふ 4	あげ 10	ア メ 28	キャラメル 16	生菓子 12	せんべい 10	その他菓子 52	15	11	酒 26.2升	焼酎 10.7升	びどう酒 1.1升	
29年	イカ 40	サンマ 35	サバ 26	ホッケ 15	ニシン 5	イワシ 10	1	2	つかだ煮 6	かんづめ 1	ちくわ 34	とうふ 4	あげ 3	ア メ 44	キャラメル 27	生菓子 20	うば玉 19	その他菓子 178	29	21	酒 34.5升	焼酎 10升	ビール 1本	
38年	イカ 21	サンマ 14	サバ 13	ホッケ 2	クジラ 34	イワシ 2	21	21	1	つかだ煮 7	ソーセージ 9	フライ 4	とうふ 10	あげ 17	ア メ 3	キャラメル 31	アイスリム 7	生菓子 6	チョコレート 107	22	4	酒 39升	焼酎 2.2升	ビール 11本
39年	イカ 19	サンマ 7	サバ 10	ホッケ 1	クジラ 21	ニシン 1	35	14	3	ソーセージ 6	フライ 4	ちくわ 13	とうふ 20	あげ 12	ア メ 2	キャラメル 47	アイスリム 5	生菓子 10	チョコレート 91	8	12	酒 39升	焼酎 3.3升	ビール 20本

注：数は回数・酒類は別。

んだ。

第3に、嗜好品の急激な伸びである。まずお酒の消費量が増えた。しかも安価な焼酎から高価なビールへと進んだ。家計が豊かになってきたことの表れと言える。ところが反対に砂糖の消費量が減ってきたことがわかる。様々なお菓子などの甘いものが豊富に出回り、砂糖を使ってのおはぎやぼた餅など甘いものを作る必要がなくなったのだと考えられる。

この3点の変化の背景に、個人の家冷蔵庫の普及があることを忘れてはならない。残念だが、宗子さんの冷蔵庫購入の時期が記録されていない。

このように家計簿は生きた数字だ。まさに世相を映す鏡である。様々な視点を据えて分析を試みることは可能である。すでに何人かの家計記録も提供されているので、今後の「ならべ読み」「くらべ読み」が楽しみである。

## 第6章 今後の課題

当会の活動も「20周年を祝う会」を終えて、新しい局面に来ている。会員が活動の意義を再確認することが大事だし、これからいかに展開していったらよいかを真剣に考えるときである。今後の課題を列記しておきたい。

### ① 基本的なルール作りをする。

個人の記録を社会の遺産にする活動である。その意義を理解し合って活動してきたが、ITを中心とする情報環境は今後さらにスピードアップし多様性を増してくるであろう。プライバシー、人権などの問題もあなどれない。日記情報の保存と個人情報の保護は活動の大きな要となってくるであろう。社会変化に合わせての基本的ルールの作成が急がれる。

### ② 日記目録を作る。

20年間で多くの日記資料他や書簡類などが提供されてきた。寄贈のもの、寄託のもの、複製（一部、全部）が許されたもの、関係史料（教科書、

卒業証書、写真など）、著作、研究論文などなど多岐にわたる。少しずつ増えてきたこともあり、これほど集まってくるとは予想もしていなかったこともあり、実際にはその総数もいまだはっきりしない実情である（一応提供された資料約4,000点、会員240人と発表している）。

幸いにも歴史や文学を研究する若者たちが日記に興味を持って、目録調査を申し出てくれた。文科省の科研費を使って労力を提供してくれるという。それは願ってもないことなので、その作業を進めているところである。所蔵する日記の内容や点数をきちんと把握しておいてこそ、今後の活動も大きく前進していく。ならば読みの可能性も出てくる。3、4年後にどんな目録集が出来るか楽しみである。

③ 生涯教育の場としての活動を大切に。

20年間様々な人々が活発に活動に参加していることである。20代から90代まで老若男女、様々な出身地と歴史を持った人々が、日記を接点として語り合い、学び合い元気をもらい合ってきた。特に最近では、若い人の存在を得て皆ますます元気になっている。

まさに生涯学習の場としての活動であることを実感する。こんな変わった生涯学習があって良いし、続けていく価値はあると信ずるところである。

④ 今後の日記保存の場を考える。

島宅から八千代市立中央図書館の集密書庫へ移して私個人の不安は軽くなった。しかしこれが永遠に続くものかどうか心配である。周密書庫内に限りもある。未だ少しずつ増えてきている日記たちは今のところは本部である私の家の書棚に納まっている。これから増えて行ったらどうするか？ 不安は尽きないが、まずは八千代市立中央図書館での存在価値と信頼を高め、ゆくゆくは同館内に「日記資料館」（日記の館）づくりをめざせるよう、地道な活動を一步一步続けていきたい。

付表1 日記塾一覧表  
 会報「日記ろまん」でたどる「わいわい日記塾」一覧表

No.	ろまん号・頁	年月日	発表者	タイトル
第1回①	2号5頁	H9.6.13	鳥利栄子	“愛の農業日記”を読む(1) レポート片岡良美
	②	2号4頁	新井仁美	小倉日記を読む
				ゲスト—高見澤幸子
第2回①	3号3頁	H9.7.18	鳥利栄子	“愛の農業日記”を読む(2) レポート片岡良美
	②	3号2頁	榊原由記子	小林艶“勤労疎開の食事日記”
				ゲスト—小林艶
第3回①	4号4頁	H9.8.22	鳥利栄子	“愛の農業日記”を読む(3) レポート片岡良美
	②	4号2頁	安部智恵	木更津高等女学校生徒の絵日記
第4回	4号3頁	H9.10.14	上條祐美	栃木県女子師範学校生の日記
			ゲスト—高橋せい	
第5回	6号6頁	H10.2.3	片岡良美	松崎宗子日記を読む①
第6回	7号6頁	H10.7.10	田中佐紀子	草谷五郎・さだ日記を読む
			ゲスト—草谷家の皆さん	
第7回①	8号2頁	H10.8.20	鳥利栄子	笠原徳日記に踏み込む
	②	8号3頁	ゲスト—笠原徳	講演／戦時下の青春—二度と戦争はごめんです
第8回	10号5頁	H10.10.21	松本喜美子	松本幸日記を読む
第9回	10号6頁	H11.1.21	榊原由記子	吉田得子日記を読む その一
第10回	11号2頁	H11.7.15	田邊重雄	父の日記を読む—陣中日誌
第11回	12号2頁	H11.9.18	伊藤久恵・鈴木博子	吉田得子日記を読む その二
第12回	14号6頁	H11.11.13	西村榮雄	日記から学ぶ
第13回	15号4頁	H12.1.19	片岡良美	松崎宗子日記を読む②
第14回	14号4.5頁	H12.6.25	鳥利栄子	移動日記展 木更津一日記は楽し 他
	14号4.5頁		ゲスト—進藤五十鈴	終戦直後の青春絵巻日記 レポート安部智恵
第15回	16号6頁	H12.7.30	國井雅代	母が伝える育児日記
			ゲスト—國井家の皆さん	
第16回	17号10頁	H12.11.12	中野祐子	大島静「旬年日記」を読んで
			ゲスト—春日多喜子	母の日記と私
第17回	18号7頁	H13.1.28	平野仁蔵	吉田得子日記を読む その三
第18回	20号4頁	H13.9.6	坂本栄子	私の日記から—我が人生に悔いなし
第19回①	19号8頁	H13.10.13	小川晶, 秋本シゲ子	移動日記展 一光, 防府／祖父の日記を読む(小川)
	②	19号9頁	H13.11.10	防府 同上 小倉日記を書いたころ(秋本)
第20回	21号4頁	H14.2.17	武内昭彦	昭和の足跡
第21回	23号2頁	H14.4.19	片岡良美	松崎宗子日記を読む③
第22回	22号6.7号	H14.7.21	大橋愛子・川名房子・目黒早苗	松崎宗子日記を読む④
★第23回	22号1.2.3頁	H14.9.28-10.6	鳥利栄子	移動日記展・女性の日記信州展
第24回	23号3頁	H14.11.10	菊池敦子	日記を展示するということ
第25回	25号6頁	H15.5.18	師岡一郎	吉田得子日記を読む その四
第26回	26号5頁	H15.7.13	今井泰	日清戦争陣中日誌
第27回	27号5頁	H15.10.26	小島敏子	母子手帳を読んで
第28回	29号5頁	H16.2.15	吉川勝子	夢に向かって描かれた絵巻日記
第29回	27号4頁	H16.3.25	片岡良美	松崎宗子日記を読む⑤
★第30回	ろまんナン	H16.4.18	熊崎淳子・國井雅代・大木めぐみ	育児日記を読む(つといで発表)
第31回	30号6頁	H16.8.22	村松洋一	中川日誌のひとつまから
第32回	32号7頁	H16.11.19	古島佐夜子・田中順子	小島富七日記を読む
第33回	33号4頁	H17.2.20	伊藤久恵	坂本栄子家計簿・日記を読んで
第34回	34号4頁	H17.9.14	北村純子	今井泰子日記を読む
第35回	34号5頁	H17.11.9	高崎明子	吉田得子日記を読む その五

個人の記録を社会の遺産に (島) 201

第36回	36号 6 頁	H18.2.8	萩原利花・中野祐子	山田ヨメ子家計簿日記を読む
第37回	35号13頁	H18.7.12	園原悦子	わたしの日記
第38回	37号 4 頁	H18.10.18	村松洋一・鈴木千代子	中川家所蔵の軍事郵便・絵ハガキ
第39回	38号 6 頁	H19.2.14	水津幸一	私の日記術
第40回	40号 4 頁	H19.4.11	山浦欣一	日記を考える
第41回	40号 5 頁	H19.9.12	伊藤久恵・永島静香	「学びは永久に」を出版して
第42回	41号 6 頁	H19.11.14	塚本昌芳・山倉洋和	塚本昌芳戦中日記に見る兵営生活
第43回	43号 3 頁	H20.2.13	大森豊子・竹内栄	吉永ハナ日記を読む
★第44回	ろまんナシ	H18.4.9	長田松代	比企傳作・戦地からの手紙
第45回	43号 4 頁	H20.7.9	古島佐夜子	父・小島富七日記にみる昭和10年の農業
第46回	43号 5 頁	H20.9.10	中野祐子・ゲストー西安代	山田義一・ヨメ子家計簿日記を読むⅡ
第47回	44号 6 頁	H20.11.12	塚本昌芳・塚本洋子	“女性から学んだ”男の日記と感想
第48回	44号 7 頁	H21.1.12	村松洋一	中川博日記を読む
第49回	45号 6 頁	H21.3.11	鳥秀光・伊藤久恵・萩原利花	富越宗太郎日記を読む
第50回	46号 4 頁	H21.8.19	國井雅代・ゲストー上野明子	上野明子さん父上の育児日記を読む
第51回	46号 5 頁	H21.9.9	西村榮雄・高崎明子	吉田得子日記を読む その六
第52回	46号 6 頁	H21.10.13	松岡澄夫	富岡日記の面白さ
第53回	47号 6 頁	H22.1.13	松本喜美子	介護、私の場合
第54回	47号 7 頁	H22.2.10	田中順子	本山志づゑ修学日誌を読む
第55回	48号 4 号	H22.3.10	鈴木千代子・大木めぐみ・片岡良美	私の縁(ゆかり)の日記たち
第56回	49号 3 頁	H22.4.14	胡本英宣・杉山賢一・片岡良美	松崎宗子を読む⑥
第57回	49号 4 頁	H22.9.8	永島静香	神澤廣吉日記を読む
第58回	50号 7 頁	H22.10.13	西村榮雄	吉田得子日記を読む その七
★第59回	ろまんナシ	H23.1.12	中野祐子	櫻井兄弟、戦時下の手紙
第60回	51号 7 頁	H23.2.9	村松洋一	櫻井家書簡輯(日露戦争時代)の報告から
★第61回	ろまんナシ	H23.4.13	鳥秀光・島利栄子・高崎明子・西村榮雄・松岡澄夫	吉田得子日記を読む その八
第62回	52号 5 頁	H23.8.10	萩原利花・中野祐子	櫻井家の家族・兄弟・友人の戦時下の手紙
第63回	52号 6 頁	H23.10.12	片岡良美・胡本英宣・杉山賢一・大木めぐみ・大藤優子	松崎宗子日記を読む⑦
★第64回	ろまんナシ	H24.1.11	古島佐夜子・田中順子・松本喜美子・村松洋一・小園嵩明・渡辺明	それぞれの平野仁蔵日記
第65回	55号4. 5 頁	H24.3.14	吉見義明	中島飛行機元職員の日記
第66回	56号 4 頁	H24.8.8	萩原利花・中野祐子	櫻井家の家族・兄弟・友人の戦時下の手紙
★第67回	ろまんナシ	H24.9.12	鳥秀光・島利栄子・高崎明子・西村榮雄	「時代を駆ける吉田得子日記」読書会
第68回	58号4. 5 頁	H24.11.14	渡辺明	昭和3年の平野仁蔵日記を読む
第69回	61号4. 5 頁	H25.3.15	片岡良美	松崎宗子日記を読む⑧
第70回①②	59号 4 頁、 60号4. 5 頁	H25.7.2	村松洋一 同上	昭和20年の平野仁蔵日記を読む Ⅱ
第71回	62号 3 頁	H25.8.7	長田松代・鈴木千代子	戦時下の手紙—台北より愛は永遠なれ
第72回	64号 8 頁	H25.11.10	島利栄子	一日50字の奇跡
第73回	62号 4 頁	H26.1.15	比江島大和	1937(昭和12)年の平野仁蔵日記を読む
第74回	62号 6 頁	H26.4.9	吉見義明	1948(昭和23)年の平野仁蔵日記を読む
★特別講演	ろまんナシ	H26.7.9	田中祐介	特別講演—近代日本の日記帳
第75回	64号 3 頁	H26.8.6	長田松代	せつ子様机下 父の教え・母の愛・友達との絆
★特別講演	ろまんナシ	H26.9.10	伴野文亮	特別講演—偉人から見た近現代史「金原明善」をめぐって
第76回	63号 4 頁	H26.10.4	伴野文亮	1950(昭和25)年の平野仁蔵日記を読む
第77回	64号 4 頁	H27.2.14	鳥秀光・松本喜美子	松本幸日記を読む—主婦の戦後—
第78回	64号 5 頁	H27.3.11	田中祐介・大木めぐみ・萩原利花・柳井三津	飯塚とみ日記を読む 1945～47年
第79回	64号 6 頁	H27.7.8	村松洋一	昭和21年の平野仁蔵日記を読む
第80回	64号 7 頁	H27.8.5	中野祐子	坂本栄子日記を読む

注 ① ★は「日記ろまん」に記事がないもの。② タイトルは短くしたり、通し番号をつけ、分かり易くしたものもある。

③ 回数は不統一のものもあったので、揃えた。

付表2 移動日記展

日記展の20年 一覧表—平成9～28年—

当会の活動の大きな柱である「日記展」。多くの人の心に、庶民の綴った日記の重みと、人が生きる足跡をたどる大切さを訴え続けてきた。平成9年、初めてのつどいの日に行った日記展をかきりに、様々な展示の場を重ねてきたが、以下、主なものを紹介する。

	開催日	会場	内容	
1	平成9	5/14	八千代市女性研修センター	1周年のつどい「戦争と女性の日記」
2		5/23	〃	2周年のつどい「戦時下の女性の日記展」
3	平成11	5/22	〃	3周年のつどい「前年度日記塾総集編」
4		5/27	〃	4周年のつどい「育児日記・こどもの日記」
5	平成12	6/25	木更津市民会館小ホール	移動日記展「日記は楽し」
6		8/13～14	八千代市東南公共センターホール	移動日記展「戦争を生きた女性の日記展」
7	平成13	7/6～8	〃	5周年のつどい「日記と歩む過去・現在・未来展」
8		10/13～11/8	山口県光市光ふるさと郷土館	移動日記展「日記と歩む過去・現在・未来」
9		11/10～18	山口県防府市立図書館	〃
10		11/24～25	京都市ウイングス京都	〃
11	平成14	6/8	八千代市女性研修センター	6周年のつどい「日記と出会う あなたと出会う」
12		9/28～10/6	長野県塩尻市市民タイムズホール	移動日記展「女性の日記 信州展」
13		12/7～平成15/1/8	八千代市市民活動サポートセンター	移動日記展。センター開所記念「千葉に関わる日記展」
14	平成15	6/2	八千代市女性研修センター	7周年のつどい「激動の昭和を生きる 平野仁蔵日記」
15		7/21	八千代市市民会館	移動日記展「戦争を生き抜いた日記」
16		8/2	四街道市市民会館	〃
17		8/3	習志野市 レストランアンダンテ	移動日記展「松崎宗子日記展」
18	平成16	6/2	八千代市女性研修センター	8周年のつどい「育児日記の魅力」
19		9/4	千葉市生涯学習センター	移動日記展「女が伝える展Ⅰ 昭和を生きぬいた日記」
20		12/1	東京と北千住丸井ホール	移動日記展「女が伝える展Ⅱ 戦時下の日記展」
21	平成17	6/10	八千代市男女共同参画センター	9周年のつどい「前年度日記塾総集編」
22		11/3	フルルガーデン八千代噴水広場	移動日記展「女性の日記から学ぶ会 活動紹介」 八千代市市民活動サポートセンターまつり（こんにち“わ”ふれあいまつり）への参加
23	平成18	6/10	八千代市男女共同参画センター	10周年のつどい「日記と出会う 過去・現在・未来」
24		8/21～27	東京都文京区 高橋書店	移動日記展「庶民の日記展」
25		6月～7月	姫路市平和資料館	移動日記展。企画展「母たちの太平洋戦争」に「大島静日記」を展示
26		3/24～31	長野県安曇野市 そば処「信州坊主」	移動日記展「長野県人の日記」

27	平成19	4/6～7/1	姫路市平和資料館	移動日記展。企画展「子どもたちが記録した日常」に「松本喜美子日記」「鈴木千代子日記」を展示
28		6/9	八千代市男女共同参画センター	11周年のつどい「日記がいっぱい」
29		10/5～12/24	姫路市平和資料館	移動日記展。秋季企画展「学びを奪った戦争」に「西村榮雄日記」を展示
30		5/21	八千代市立村上東中学校	移動日記展「庶民の記録の活用の途を探る一教材化の試み」八千代市教育研究会中学校社会科部会にて発表及び展示
31	平成20	6/14	八千代市東南公共センターホール	12周年のつどい「戦時下の手紙」
32		7/23～25	八千代市勝田台ステーションギャラリー	移動日記展「戦時下の手紙展」 八千代市平和事業への協力
33		8/1	鳥代表宅	青森から来訪の会員に「ひとりのための日記展—戦時下の手紙」
34		10/4～12/23	姫路市平和資料館	移動日記展。企画展「戦地からの手紙」に「比企傳作書簡」を展示
35	平成21	6/13	八千代台東南公共センターホール	13周年のつどい。「手紙が語る戦争」出版記念会
36		11月	鳥代表宅(ミニ日記の館)	「平野二郎さんを偲ぶ」
37	平成22	6/12	八千代市男女共同参画センター	14周年のつどい「前年度日記塾総集編」
38		8/4～11	佐倉市 NPO 法人佐倉一里塚	移動日記展「手紙が語る戦争」
39		11/10～15	鳥代表宅	「利栄子の小学生時代展」
40		11/27	八千代市福祉センター	移動日記展「女性の日記から学ぶ会の活動」 八千代市主催地域デビュー講座への協力としてワークショップ参加
41	平成23	6/11	八千代台東南公共センター	15周年のつどい「日記に学び15年」
42	平成24	6/9	ユアエルム八千代台店 エルムサロン	16周年のつどい「吉田得子日記」出版記念会 吉田得子日記展示
43		7/12	八千代市高津公民館	移動日記展「今の安心したくらしが続くために考えよう」小学生対象の出前授業
44		12月～25年2月	八千代市立郷土博物館	移動日記展。企画展「おじいちゃん おばあちゃんの子どものころ」に「鳥利栄子小学生日記と作品等」を展示
45		12/16	佐倉市臼井公民館	移動日記展「吉田得子日記」臼井文化懇話会定例会講演会にて
46	平成25	6/8	八千代市男女共同参画センター	17周年のつどい「戦中戦後生きた書いた」
47		6/30	岡山県瀬戸内市中央公民館	移動日記展「吉田得子日記 お里帰り展」
48	平成26	6/7	八千代台東南公共センターホール	18周年のつどい「戦中戦後生きた書いた」
49	平成27	6/13	八千代台東南公共センターホール	19周年のつどい「戦中戦後の日記に学ぶ」
50		7/1～5	八千代市立中央図書館	移動日記展「平野仁藏日記展」図書館開館記念展示
51	平成28	6/11	佐倉市ウィシュトンホテル・ユーカーリ	20周年のつどい「女性の日記から学ぶ会20年の歩み」

以上、主な日記展としては、つどいの場で20回、代表宅で3回、移動日記展の形で28回、計51回を数える。その他、鳥代表が講演会や外部の学習会研修会の一環として行った日記展が約350回、片岡会員が大学生対象の教科教育の授業として行ったミニ日記展約110回等、様々な形での日記展を多数実施している。

